料金別納
郵便

誌　名
青峰同窓会会報

発行日　2017年11月
発　行　国立鈴鹿工業高等専門学校 青峰同窓会 広報委員会
〒510-0294 鈴鹿市白子町　TEL：059-386-1031　E-mail：almn@suzuka-ct.ac.jp

2017年号

青峰同窓会会報

大王埼灯台

INDEX

会長挨拶……1
高専を取り巻く状況と鈴鹿高専の取組…1
校長　新田 保次
卒業生便り……2
■「高専例会」の紹介　大西 正博（42Ｃ卒）
■昭和42年度入学（6期生）全科同窓会開催報告
加藤 友治（47Ｃ卒）
■第3回鈴鹿高専OBゴルフコンペ開催　実行委員会事務局
■三重県の現状と今後の取組について　下野 幸助（h09E卒）
定年退職を迎えて……9
■中井 洋生（教養教育科）
■花井 孝明（電気電子工学科）
転出教員からの便り……11
■井瀬 潔（電子情報工学科）
■南部 紘一郎（機械工学科）

ご 挨 拶

青峰同窓会 会長 小手川 智（42C卒）

同窓会会員の皆様にはお変わりなくご健勝のこととお喜び申し上げます。

今年も日本列島は台風による風水害が多発しました。集中豪雨による被害も多く被害が九州地方から北海道におよぶなかで皆様にはお変わりなかったでしょうか。三重県においては台風21号によって大きな被災となりました。特に伊勢市においては48時間雨量が観測史上１位の539mmで11万人に避難指示が出て市街のいたるところで浸水被害に遭いました。母校高専祭では２日間開催の予定が１日中止となり大変残念でありました。世界でもこのところ米国の大型ハリケーン被害やメキシコ大地震など自然災害が多発しております。地震のようにいつ襲ってくるか分からない災害や、集中豪雨や台風の来襲に十分気を配っていただきたいと思います。防災減災においては「自助」が基本と言われています。自分（家族）の命は自分で守るということだそうです。

では、同窓会の様々な情報をお伝えします。鈴鹿高専において文科省からの予算（運営費）が年々１％削減される事が危惧されております。これは教員の研究費や学生の教育に大きな影響を与えます。そこで近隣の卒業生が集まって校長先生、ＯＢ教員と共に母校を応援する方策を検討する会を設けました。

卒業生の活動が活発になってきております。今年10月の高専祭に時期を合わせ２期生が母校に集まって様々な行事を予定しておりましたが、上述の台風襲来のため母校のイベントは中止しました。ただし夜の懇親会は盛会のうちに実施されました。10月中旬には６期生が湯ノ山温泉で会合を持ちます。二つの会合とも学科を問わず学年単位での懇親会です。クラス会から学年会、ゴルフコンペのような年代を問わずの同好会が増えてきております。今後も同窓会報には会合の様子を掲載しますので、同窓会事務局までお申し込み下さい。

数年に亘って報告しております走り高跳びの衛藤昂さん（ｈ23Ｓ卒）が今年の日本陸上選手権で優勝して8月ロンドンで開催された世界陸上に出場しました。2020年東京オリンピックを目指して奮闘しております。

同窓会員の皆様のご健康とご多幸を祈念してご挨拶といたします。

高専を取り巻く状況と鈴鹿高専の取組

鈴鹿工業高等専門学校 校長 新田 保次

高専を取り巻く状況は厳しい。大きくは２つ挙げることができる。一つは、高専１年生の年代、つまり16歳人口の減少である。二つ目は運営費交付金（基盤的経費）の継続的な削減による財政問題である。

■16歳人口の減少

16歳人口の減少では、2017年から2030年にかけては、116万人から97万人へと約20万人の減少が予想されており、志願者の確保が相当困難になることが予想される。国立高専の定員は１学年約１万人であるが、中卒人口の大幅な減少下において、高専定員に変化がないとすると、入学者の質の低下も危惧されることになり、志願者の数の確保とともに、入学者の質の維持も重要な課題となってくる。この課題に応えるためには、社会的に高く評価されている“高専教育”であるが、その現状に甘んじることなく、不断の努力で教育の質の改善を図ることが必要とされよう。

■国立高専の財政問題

国立高専の経営においては、授業料収入は全体の事業費の16％程度であり、国からの交付金に８割以上を依存している。このような状況における交付金削減は、かなり学校運営を困難なものとしている。運営費交付金は、主に基盤的経費と特別教育研究経費に分類されるが、基盤的経費が毎年数億円削減されている。この削減分を特別教育研究経費でカバーしている状況である。ただ、この特別教育研究経費は競争的資金であり、公募競争の中から勝ち取る仕組みとなっている。

さらに言えば、基盤的経費は人件費と物件費に分類されるが、削減分は物件費にしわ寄せがきており、毎年8億円程度、１校当たり1500万円程度、物件費が削減される状況が続いている。このような状況が続くと、教職員は多数いるが、実験実習に必要な備品は揃わず、設備も更新されない、いわば学習塾的な状態に陥ることになる。

■鈴鹿高専の挑戦

このような厳しい状況の中で、本校は特別教育研究経費に積極的に応募し、複数のプロジェクトを獲得している。現在、主なものとしては、３つあげることができる。

一つは、平成27年度から行っている「ロボットエンジニア育成事業」であり、全国国立高専の拠点校として活動している。この関連事業は、今年度新たに発足した、“KOSENイニシアチブ4.0”にも採択され、さらに発展する見込みである。二つ目は、「情報セキュリティ人材育成事業」であり、これは東海北陸近畿ブロックの実践校としての役割を担っており、地域で即戦力として活躍できる人材を育成することをねらいとしている。三つ目は、今年度、KOSENイニシアチブ4.0に採択された「卓越したグローバル人材育成事業」である。この事業においては、本科、専攻科をまたがる７年一貫教育により、世界的に活躍できる、極めて優秀な人材を育成することをねらっている。

このように本校は、厳しい状況にありながらも、教職員一丸となって、社会のニーズを的確に捉え、地域と世界の発展に貢献する、人材づくりのために、教育研究を通じて頑張っていますので、引き続きご支援よろしくお願いします。

卒 業 生 便 り

「高専例会」の紹介

大西 正博（42Ｃ卒） 応援；川路繁市（42E） 大橋和彦（42M） 藤田宏一郎（42E） 平松昇（43E）

「高専例会」は１期生の川路さん（42E）が中心となって召集し、毎年数回、１～３期生メンバーが集まり開催している会です。発足は昭和47年（1972年）頃ですので、約45年の歴史を持ち、長期間に亘って、途絶えることなく活動を継続してきたユニークな会として、皆様に活動の一端を紹介したいと思います。現在の会員数は１期生を中心に２、３期生を加えて22人です。科別には、Ｅ：11人、Ｍ：７人、Ｃ：４人ですが、科を超えた和やかな雰囲気の会です。毎回の会合には10～15人が参加しています。名古屋近郊のメンバーが主体ですが、滋賀県や伊勢市、豊橋市在住のメンバーも参加しています。活動は当初、主に名古屋市内の「西川屋（うどんすきで有名でした）」で、季節の料理での懇親会が主体でしたが、メンバーの遠地赴任に際しての送迎や結婚時には新婦を同伴してのお祝い会なども、行ってきました。最近は春の昼食会と健康麻雀、秋（冬）の１泊懇親会とゴルフコンペを主体に行っています。ここ数年の主な行事内容は2012年：５月、湯の山、１泊懇親会とゴルフ、15名（故稲葉さん（42M）の最後の懇親会になりました）。2014年：５月、昼食会と健康麻雀、10人。９月、茶臼山、１泊懇親会とゴルフ、８人。12月、忘年会、14人。2015年：６月、昼食会、11人。11月、湯の山ロッジ、懇親会とゴルフ、14人。2016年：７月、昼食会、15人。12月、湯の山ロッジ、懇親会とゴルフ、14人。2017年：５月、昼食会と健康麻雀、14人。この内、2012年５月の湯の山での懇親会については、平松さん（43Ｃ）が青峰同窓会ＳＮＳに「冥途の土産」と題して投稿されました。金環日食の観察なども含めて、雰囲気がよくわかる、いい文章でしたので、写真と47Ｅ武村さんからのコメントも付けて、添付します。ご参照願います。また平松さんは青峰同窓会ＳＮＳに「高専時代を想う」「高専例会」と題して投稿されていますので、ぜひこの内容もご参照ください。懇親会では、健康相談など身近な話題から高専の将来像、ＯＢの役割など硬い話題も、同窓会長の小手川さんにも加わってもらって、大いに盛り上がって議論しています。会の主要メンバーである１期生は70歳の古希を超えましたが、会の最後には、次回も全員元気で会いましょうと掛け声をかけあって、無事の再会を約束しあっております。身近で何でも話せる仲間の会として、長くこの会を継続していきたいと思っております。

以上

投稿記事

「冥土の土産」

＊＊＊高専例会＊＊＊　2012年5月23日　平松　昇(43E 卒)

2012 年5月20日：恒例の高専例会が15人の参加で湯の山温泉で開かれました。1 期生を中心にした集いですが、科(M・E・C)を越えての交流はほのぼのとした人間模様でした。団塊世代も含め、この人達が日本の高度成長に貢献してきたのだなあと感ぜずにはいられません。2 期生の私一人がそのウオッチヤーとして今回の例会に参加しています。

勿論有志だけですが3 時からマージャン会、そして6 時から宴会の始まりです。宴の後はカラオケに興じ深夜まで再びマージャン会。それぞれ思い思いに床につき、翌朝は世紀の天体ショー、金環日食の観察。1,000 年に一度の大イベント

を2人分しかない観察用メガネを奪い合いながら、ときどき雲間から覗く日食を追いかけました。

日本国中で騒いでいるこんな大イベントに合わせた例会は忘れろと言ってもどなたも決して忘れられないでしょう。この年代ですと冥土の土産にぴったりです。

金環日食の観察の後はのんびりと朝食をとり私は名古屋への帰路につきました。自営業の身ですので元気な内は仕事を疎かに出来ません。10人ほどはこの後のゴルフコンペに参加したようです。幹事の川路さん、素晴らしい会を有り難うございました。

テーブル左側の後列左から 43E 平松 42C 小手川 42M 小島 42E 野口
中央 42C 大西 42C 星野 前列 42M 大橋 42M 稲葉
テーブル右側の後列左から 42E 川路 42C 磯部 42E 藤田 42M 鈴木
前列 42E 長谷川 42E 益川（敬称略）

＊＊＊＊＊　47E 武村さんから記事に関するコメント　＊＊＊＊＊

先生や先輩から授業中に、あるいは寮生活のなかで、一期生の方々のことを何度も何度も聞かされましたので、お名前は聞き覚えがありますが、お写真、お顔を初めて拝見し、感激です。

麻雀、ゴルフ、そしてお酒に関しても、過去の激動の時代に大活躍された大先輩方ですから、そちらの腕前も神様級ではないかと想像します。

2016年、2019年には日本各地で部分日食が見られるそうです。「冥土の土産」はまだまだ早すぎますよ…

＊＊＊＊＊　青峰同窓会SNSに入会して下さい　＊＊＊＊＊

「高専例会」で検索頂けば、私の高専例会の記事をまとめて読めます。
「/高専時代/」で検索頂けば、「1期・2期生の高専時代を想う」の記事をまとめて読めます。

昭和42年度入学(6期生)全科同窓会開催報告

加藤 友治 (47C 卒)

秋たけなわの平成29年10月12日(木)、三重郡菰野町の「希望荘」において鈴鹿高専昭和42年入学全科同窓会が盛大に行われました。昭和42年(1967年)に大志と不安をもって6 期生として鈴鹿高専に入学してから50年が経ち、その節目ということで企画した同窓会でありました。ちょうどこの年から全寮制が始まり、それぞれ進む道は違っても、まさしく同じ釜の飯を食った仲間が久しぶりに会う同窓会であり、それも卒業以来初となる全科(機械工学科、電気工学科、工業化学科、金属工学科) が一堂に集まる総勢61名の合同同窓会でした。

16時ごろに希望荘のフロントでチェックインすると、幹事が用意した学科と名前入りのネームプレートを受け取り、あらかじめ部屋割りをしてあった部屋でくつろいだ後、浴衣に着替えてまずは温泉に入りました。希望荘にはいろいろな温泉があり、大浴場の自助の湯、露天風呂の望山の湯、檜風呂の木漏れ日の湯、そしてラドン熱気浴があり、温泉好きの者は早めに来て温泉三昧でした。

そして19時からいよいよ全員が集まる宴会です。宴会会場は１階の大ホールですが、まずは酔っぱらう前に全員の集合写真、学科別の集合写真を撮りました。

すでにもうその時から和気あいあいとなり、みんなニコニコ顔での写真撮影となりました。撮影者は同期で写真店を営んでいる金属工学科の戸澤君です。そのあと、学科別の12の円卓テーブルに分かれ、幹事の一人である金属工学科の稲垣君の発声で乾杯をし、宴会開始となりました。もちろん始めは食事もしますが、円卓テーブルですからすぐに移動しながら酒を酌み交わし、学科を超えて昔話や楽しい話で盛り上がり、あちらこちらで笑い声が絶えずにぎやかな宴会となりました。当初の計画では、久しぶりに会う人もいることから顔と名前を一致してもらうため、簡単に自己紹介してもらうつもりでしたが、全くその必要はありませんでした。宴の途中、学生時代の懐かしい写真（入学・卒業、研修旅行、行事など)、そして最近の高専の写真(校舎・寮の施設、行事、学校の周りの環境など)のスライド動画をプロジェクターで映すと、懐かしさと高専の変わりように驚く人も多くおり、大好評でした。これらの写真は各学科の幹事が集めたものを加藤が編集したものでした。大ホールの使用時間は21時までとなっており、２時間はあっという間に過ぎ、最後は校

歌をスライド動画(演奏・歌声及び歌詞付き)に合わせて大声で合唱して中締めとなりました。

二次会はあらかじめ学科ごとに決めてあった大部屋で持込の酒やつまみで続きの宴会となりました。中には昔の写真や50年史を持参したところもあり、話が絶えず夜遅くと言うか日が変わっても続いたということでした。一方、歌が好きな人はカラオケルームで12時の終了まで大いに歌合戦をしたようです。いずれも大変思い出の残る楽しい同窓会となりました。

同窓会にはオプションとして御在所岳の登山組（ロープウエイ組もあり)、ゴルフ組、観光組などがあり、それぞれ気の合った仲間と秋の日を楽しみました。これもまた楽しい思い出となり、このような同窓会を次はいつするのか楽しみにしているとの声も意外と多く聞きました。なお、御在所岳の登山組は12日と13日に実施されましたが、特に裏道は昔の遠足(１学年)の時の面影はなく、沢筋が大崩落していたそうです。ゴルフ組は12日のグレイスヒルズCCでは23人が参加し、13日の鈴鹿高専OB懇親ゴルフ(三重CC)には18人が参加しました。また、観光組では13日に母校を訪問し、寮の案内をしてもらい新しい食堂で食事をしたそうです。

今回の同窓会の企画は半年前の３月に同期生でゴルフをしている者から話が持ち上がり、まずは希望荘の予約を確保して、各学科から幹事を出してもらって６月の早い段階から参加者の連絡など準備に入りました。各学科幹事の皆さんのおかげで思い出の多い全科合同の同窓会となり、大成功につながったことに感謝申し上げます。

昭和42年度入学 工業化学科 加藤友治

昭和42年度入学 6期生 全科同窓会

第３回鈴鹿高専OBゴルフコンペ開催

実行委員会事務局

第３回大会は2017年(平成29年)５月27日(土)に、津市芸濃町の鈴鹿カントリークラブの西コースで開催されました。今回も好天に恵まれ参加者は33名。

優勝は、山口貢君(50M) ネット69.2
２位は、小島肇さん(42M) ネット71.0
３位は、鈴木幸行さん(46M) ネット71.6
グロススコアー部門では、野崎博史さん(47C) 79
２位は、山口貢君(50M) 80
３位は、小島肇さん(42M) 83でした。
３回の皆さんの成績は次の表のとおりです。

回数＼スコア	70台	80台	90台	100台	110台	120台	参加者数	平均グロス
１回	1	2	12	11	12	2	40	101
２回	0	2	16	15	10	4	47	105
３回	1	5	13	10	3	1	33	98

１、２回は鈴鹿CCチャンピョンコースの中コース、第3回は西コースで成績に差があったのかな？第2回優勝者の杉森(47C) から優勝カップが山口(50M)に引き継がれ「平日の秋にも開催しては？」とのご意見があり、実行委員で検討することになり恒例の優勝者スピーチで今回も盛会のうちに終了。

第3回鈴鹿高専OB ゴルフコンペ 組合せ

■2017年5月27日(土)
■鈴鹿カントリークラブ 西コース

コース	時分	氏名	氏名	氏名	氏名
アウト	9:38	小島　肇 42M	長谷川俊男 42M	星野　克明 42C	川西　宏次 43M
	9:45	野崎　博史 47C	杉森　正秋 47C	加藤　友治 47C	打田　武 55C
	9:53	内田　賀久 47E	藤村　勝久 47E	荒木田秀明 47E	山本　俊二 47E
	10:00	久保田隆志 47H	中谷　孝 47M	諸戸　眞 47C	疋田　一美 47M
	10:08	榊　茂之 60H	鏡　誠 62H	鈴木　孝行 46M	小手　川智 42C

コース	時分	氏名	氏名	氏名	氏名
イン	9:38	川口　宗弘 50M	鈴木　誠 50M	山口　貢 50M	
	9:45	松尾　文夫 48C	中野　郁夫 48C	太井　豊 48C	井坂　宗晴 46M
	9:53	室　眞市 53M	寺本　正和 54M	望月　哲弥 53M	安田　忠利 53M
	10:00	藤川　勝彦 50H	千種　敏一 50H	松見　秀敏 50H	西川　幸嗣 50H

追記：2017年(平成29年)10月13日(金)三重CCで45名参加し第４回を開催。

平成28年度青峰同窓会会計報告

	摘要	金額(円)
収入の部	平成27年度からの繰越金	28,145,064
	平成28年新入会員(27年度卒業生201名)より入会金・終身会費	2,211,000
	預金利息	5,259
	合計	30,361,323

	摘要	金額(円)
収出の部	会報発行経費	828,334
	SNSサーバー構築費・利用管理費	195,480
	事務費	164,373
	先進的エンジニア育成基金寄付(28年度分)	1,000,000
	衛藤選手激励金	100,000
	20回高専シンポジウム寄附	30,000
	平成29年度への繰越金	28,043,136
	合計	30,361,323

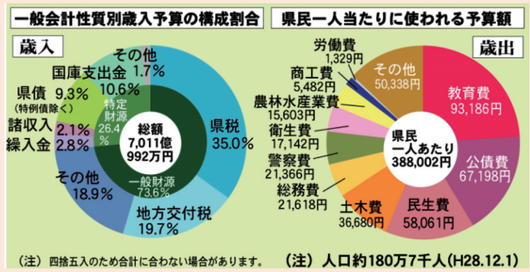
三重県の現状と今後の取組について

下野　幸助（h09E卒）
三重県議会　総務地域連携常任委員長

私は平成８年度（1997年３月）に本校電気工学科を卒業し、その後、豊橋技術科学大学卒業、慶応義塾大学大学院経営管理研究科（MBA）修了、内閣官房職員などを経て、現在、三重県議会議員（2011年初当選、2015年２期目当選）の職に就き、今年度は三重県予算の約３分の2を占める事業（三重県総務部・地域連携部三重とこわか国体・三重とこわか大会、リニア中央新幹線、行財政改革等）を所管する三重県議会総務地域連携常任委員会の委員長を務めています。そこで、今回は皆様に三重県の主な現状と今後の取組についてご報告させて頂きます。

（１）三重県の財政について

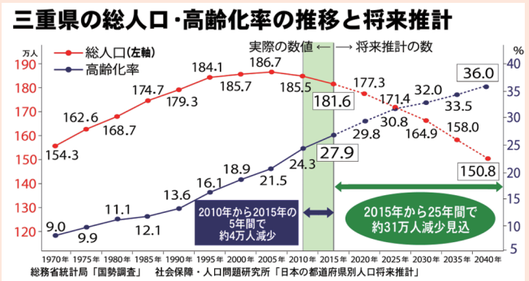
一会計年度内（４月１日から翌年３月31日）において、県が必要とする経費を歳出予算、それを賄うための財源を歳入予算といいます。平成29年度三重県当初予算の歳入（円グラフ左）は県税、地方譲与税、地方交付税などのようにその使途が特定されていない一般財源と、国庫支出金、県債、使用料及び手数料などのようにその使途が特定されている特定財源に分けることができます。一般財源の主要なものは35.0％を占める県税と19.7％を占める地方交付税であり、特定財源の主要なものは10.6％を占める国庫支出金と９.３％を占める県債です。歳出予算（円グラフ右）を県民一人当たりでみると、小・中学校、高等学校の教職員人件費、高校整備などを主な内容とする教育費が24.0％、また公債費（県債償還）が17.3％、さらに児童、高齢者、心身障がい者等のための福祉施設の整備・運営や生活保護などを主な内容とする事業を行う民生費が15.0％で、この３費目で歳出全体の約５割強を占め、県民一人あたりの歳出総額は約 38万8千円です。



（２）三重県の人口減少状況と対策について

県内人口は2007年187万人をピークにその後、減少に転じ人口減少が本格的に始まっています。2010年と2015年の国勢調査を比較すると185.5万人から181.6万人と減少し5年間で約4万人減少という結果でした。また、少子高齢化が進み、高齢化率は25％を超え、４人に１人以上が65歳以上の高齢者となっています。

このような状況を受け、2015年度三重県議会では人口減少対策調査特別委員会（委員長：下野幸助）が設置され議員13名で幅広い議論を行いました。



三重県　年間人口減少数（直近３年実績）

人口減少要因		2014年実績	2015年実績	2016年実績	直近３年間人口減少数（3年合計）
①自然減少	出生数－死亡数	▲5,798人	▲6,189人	▲6,628人	▲18,615人
②社会減少	転入数－転出数	▲2,839人	▲4,218人	▲3,597人	▲10,654人
三重県　年間人口減少数（①自然減少＋②社会減少）		**▲8,637人**	**▲10,407人**	**▲10,225人**	**▲29,269人**

県民人口　183.3万人（2013年12月）→ **179.9万人（2017年8月）**

今後、三重県では毎年１万人強の人口減少へ

人口減少については、大きく分けて自然減少、社会減少の２つが考えられます。三重県では、自然減少で毎年６千人強、社会減少で4千人弱、合わせて年間1万人程度の人口減少が、今後続くと見込まれます。自然減対策として、県では若者のライフステージ（結婚・妊娠・出産・子育て）にあった対策や高齢者の皆様には健康寿命延伸の取組などが行われています。また、社会減対策として、県では大学進学希望者の約８割が県外大学に進学し、その多くはそのまま県外で職に就く状況を鑑み、グローバル人材の育成や奨学金制度の拡充など教育環境の向上に努めています。

（３）新名神高速道路・中勢バイパスについて

新名神高速道路は、名古屋市と神戸市を結ぶ延長約174kmの高速道路です。三重県区間である四日市JCT～亀山西ＪＣＴ（仮称）までの延長約27.8kmのうち、四日市ＪＣＴ～新四日市ＪＣＴの4.4kmは平成28年8月11日に完成しました。残りの区間である新四日市ＪＣＴから亀山西ＪＣＴ（仮称）23.4kmは平成30年度開通予定です。

中勢バイパスは鈴鹿市を起点として津市を経由し松阪市に至るバイパス（全線33.8km）で、国道23号の渋滞解消、交通安全の確保と地域経済の発展を支援するため整備が進み、約28.1kmが開通しています。平成30年度には鈴鹿・津工区（約2.9km）が開通予定です。

（４）三重とこわか国体・三重とこわか大会

平成33年（2021年）に三重県で第76回 国民体育大会が開催されます。三重県では昭和50年（1975年）の第30回大会以来、46年ぶりとなります。基本目標を「県民力を結集した元気なみえの創造」とし、本県で開催する国体が、スポーツを通じて人びとに夢や感動を与え、県民の皆さんの一体感を高めるとともに、人と人、地域と地域の絆づくりが進み「活力に満ちた元気なみえ」につながる大会をめざします。また、国体開催に伴い、第21回全国障害者スポーツ大会「三重とこわか大会」も開催されます。全国障害者スポーツ大会は、障がいのある選手が競技等を通じ、スポーツの楽しさを体験するとともに、国民の障がいに対する理解を深め、障がい者の社会参加の推進に寄与することを目的とした障がい者スポーツの祭典です。2020年の東京オリンピック直後の開催となりますので今後の日本全体のスポーツ振興の起爆剤となるような、また、新しい国体のスタイルを提言していけるよう、万全を期し、大成功に向けた準備を三重県・三重県議会が一体となって進めていきます。

9月21日に本校卒業生で2016年リオ五輪に出場するなど陸上走高跳で世界的に活躍している衛藤昂（えとうたかし）選手（AGF鈴鹿株式会社）に三重県議会 総務地域連携常任委員会にお越し頂きスポーツ推進の取組について参考人として、これまでの経験、今後のキャリア等についてご報告、意見交換を行いました。（写真右）なお、衛藤昂選手は本年度開催されたえひめ国体において、三重県を代表し旗手を務めるとともに国体３連覇（走高跳）の成績を収めました。

（５）リニア中央新幹線

リニア中央新幹線は、東京（品川）から大阪市まで約438kmを我が国独自の技術である超電導リニアによって67分で結ぶ新たな新幹線です。2027年に先行開業を目指す品川・名古屋間（約286km／40分）は2014年12月から工事が着工されています。2045年全線開業（品川・大阪間）を予定していましたが、財政投融資の活用により最大８年間の前倒しが可能となり、2037年の全線開業に向け、1日でも早い名古屋・大阪間の工事着工に向け、今後は環境アセスメントの早期実施が望まれます。経済効果については東京・名古屋間開通で8900億円、東京・大阪全線開通で1兆5600億円と試算されています。名古屋以西については９月11日に３府県が初めて合同で三重・奈良・大阪リニア中央新幹線建設促進決起大会を開催し、各府県知事が今後の連携強化の確認をしました。以上、三重県の主な現状と今後の取組についてご紹介させて頂きました。今後とも三重県政に対するご理解ご協力を何卒よろしくお願い申し上げます。

定年退職を迎えて

定年退職を迎えるにあたって

「鈴風」139号より転載

教養教育科
中井 洋生

初めて「鈴鹿高専」という校名を聞いたのは中学校３年生の時のことでした。高校受験を控えていた時に、同級生の中の二人が鈴鹿高専を受験するという話を聞いたのが最初でした。その二人は試験に合格し、電気工学科と工業化学科に入学していきました。その後何年間も高専という学校を意識することはありませんでした。ただ、外国語を専門とする大学の中で、同級生の一人が函館高専出身で、就職したもののどうしても英語の勉強がしたくて大学に入り直したという少し変わり種の人物でした。

次に鈴鹿高専の名前を聞いたのは、大学を卒業し高校の教員をしていた時で、大学の先輩にあたる先生から鈴鹿高専の教員採用の面接を受けないかというお話をいただいた時のことでした。幸いにも採用され、今から35年前の1982年(昭和57年)の４月に鈴鹿高専に赴任することになりました。

この35年間を振り返ってみると、様々なことが脳裏に浮かんできます。赴任した頃は４学科で１.２年生は全寮制でした。その後何回も担任を経験しましたが、やはり印象に残っているのは最初に担任をした電気工学科のクラスです。この時担任した人たちからは卒業してからも連絡があり、会う機会があると昔話をして楽しんでいます。今ではこの時の学生が父親になり、その息子さんが鈴鹿高専に在学しているのをみると時の流れを感じてしまいます。

この間に高専自体もずいぶんと変化してきました。最初数年間ほどは、大きな変化もなく、ゆとりを持って教育・研究ができていたように思います。その後、平成元年に電子情報工学科が設置され、５学科になり、平成５年には専攻科も設置されました。学生数も1000名を超えるようになり、学校の様相が少しずつ変化してきました。特に、教職員にとっては、平成16年に国立高専から独立行政法人国立高等専門学校機構となってからの変化が大きかったように思います。

その間変わらずにやってきたことは、英語の授業を通して、言葉の面白さ、外国語を学ぶことの楽しさを伝えようとしてきたことです。外国語がわかるようになると異なった国の文化に触れることができるだけでなく、自分の言語についても多くのことを発見することができます。外国語を通して新しい違った世界を見ることができ、様々な発見をすることができるということを体験してもらいたかったのです。性格上、教えるというよりも自分が経験したことを授業の中で吐き出してきたという方が当たっているかもしれません。

教養教育に携わる者として、心にとめてきたのが荘子の「無用の用」という言葉です。一見無用とされているものが、実は大切な役割を果たしていることがあるものです。教育の効率化という名のもとに重要性がないと判断され、無くなったり縮小されたりしたものがいくつかありました。何か大切なものが削られていくような違和感がありましたが、この流れをどうすることもできず、定年を迎えることになってしまいました。

残念に思うこともありますが、教員をしていたからこそ味わうことができる喜びもたくさんありました。授業中はもちろんのこと、クラブ活動や様々な行事に学生諸君が挑戦し、成長していく姿を見ることは私の活力源でした。

お世話になるばかりで、役に立てることはあまりありませんでしたが、何とか職務を最後までつとめることができましたのは、偏に多くの皆様のご指導、ご協力のおかげであると感謝しております。心よりお礼申し上げます。

平成29年度からは高度化再編により、新しい時代の高専へと踏み出すことになります。これからの鈴鹿高専の発展と皆様のご活躍を祈念し、退職の挨拶とさせていただきます。

前へ進むために

電気電子工学科
花井 孝明

子供の頃は、引っ込み思案でひ弱な少年だった。小学６年生まで過ごした茨城県日立市の海沿いは夏でも涼しく、風のよく通る縁側で西瓜を食べるのが楽しみだった。あの頃の夏は優しかった気がする。井戸水を汲んで薪で風呂を沸かすのが普通であり、蛇口を捻れば水が出る現在からは考えられない生活だったが、山と海に囲まれた豊かな環境が今も懐かしく思い出される。

高校３年生の夏休み、クラシックギターを爪弾き、屋上の物干し台に上って洗濯物の陰で実存主義小説に熱中した。定年退職すればあの頃に戻れると考えていたが、再雇用の身分も閑なようで意外にやるべき事が多く、そのような生活は実現していない。ただ、大学２年生から始めたコントラバスは続けていて、名古屋方面で活動しているマンドリン合奏団の練習や演奏会には家内と共に参加している。

2001年度に本校に転任して、JABEEに詳しいと勘違いされたのがきっかけで、2002年度の途中から専攻科委員会専門部会の一員として活動するようになり、教育点検システム部会長として翌年の受審に備えることとなった。2003年度から２年間電子機械工学専攻主任、2007年度から4年間専攻科長と、主に専攻科に関わってきた。その間に２回のJABEE審査を経験して、守衛さんに校門を開けてもらって帰宅することも珍しくなかった。

そのように落ち着かない毎日に明け暮れる中で、桑原先生の発案で始まった、６年間に渡る大学教育の国際化推進プログラム(海外先進教育実践支援)の最後の２年間に立ち上げた、ジョージアンカレッジにおける専攻科生の語学研修＋工学的実習のプログラムは、形を変えて現在も継続されている。

その一方で電気電子工学科にはほとんど貢献しておらず、学級担任には２回しか携わっていない。１回目はクラスから５名の退学・留年者が出て、年度末の会議で校長に叱られるぞと言われたこともあったが、勝山校長は何もおっしゃらなかった。

ジョージアンカレッジから本校への来訪

２回目は５年生になった時点で35名と少ない人数のクラスだったが、成績はともかく全員揃って卒業した。同窓会にも呼んでもらっている。非常に楽しい雰囲気のクラスだったため、私も気分のよい時間を過ごすことができた。

卒業式当日、クラスルームにて

いろいろなクラスの同窓会に出席してきたが、転任したとき４年生だったクラスの同窓会は強く印象に残っている。授業の途中で抜け出そうとする学生が続出し、とんでもない学校に来てしまったと驚かされた。しかし、しばらくすると、とても元気で大人の考え方ができる学生が多いことが分かってきた。卒業して５年目に行われた同窓会は出席者が多く、留学生も招いた盛大なものであった。

H10E 同窓会

この学校には理解し難い規則があり、今もなお違和感を禁じ得ない。例えば、試験になると学生が制服またはスーツを着なければならない。なぜかと問うと学校行事だからという答が返ってくる。試験が行事だという話は聞いたことがなく、まったくもって意味不明だ。他にも納得できないことは多いが、すでに長文になっているので書かない。こういった訳の分からない慣習に染まらないことを切に願う。

研究は何もしなかったに等しい。電子顕微鏡のハードウェアと新技法の開発をテーマにしてきたが、

チャンピオンデータを出さないと論文にならない世界で勝負するだけの力がなかった。2012年にTEMが設置されたが、お世辞にもハイスペックと言える装置ではなく、材料研究には有用であっても高分解能を狙うような研究には適していない。

自宅のある桑名と鈴鹿を往復する毎日にはいささか疲れた。片足を名古屋に置くつもりで桑名に拠点を持ったわけだが、研究面でも文化面でも中途半端な位置取りだったことは否めない。

多くの時間を専攻科と点検評価に費やしてきた。点検評価は大切であり、負担になるからと言って頓挫させてはならないが、学校全体の意識が高まっているとは思えない。負担増と経費削減により学校運営は難しくなっているけれども、教育研究はもちろ営は難しくなっているけれども、教育研究はもちろん自己評価にも力を注ぐ必要がある。

300kVTEM(H9000)の搬入

教職員の負担減が急務であり、予算を取って負担が増えるようでは本末転倒である。後に残る事業を展開すべく、予算要求の内容を工夫しなければならない。世界的に見てポピュリズムが台頭する中、それに流されないだけの見識を持つ学生を育てることにより、よりよい明日を築くために歩を進めて行っていただきたい。

転出教員からの便り

弓削商船高専 校長　井瀬 潔（電子情報工学科）

弓削商船高専に赴任しました。学校のある弓削島は瀬戸内海にある島の1つで、細長い島です。
写真１が本州側を見たとき、写真２が四国側を見たときです。写真１の左の端に本校の練習船が停泊しています。写真２は学校の横にある海で、突堤の左が海水浴場になっています。海はこのように波がありません。

本校に来るには、本州側からは福山か尾道からバスで因島に来て（１時間くらい）、フェリーで生名島（いきなじま）に渡り、バスに乗り、生名橋（写真１の右端に写っています）と弓削橋（写真１の左の橋）を渡って弓削に来ます。船を使うなら三原から快速船で生名島に来るのが早いかも知れません（約40分）。また、因島までくれば、因島から弓削島への快速船もあります。四国側からは今治から快速船に乗ると１時間で弓削に着きます。自動車で来られる方は、西瀬戸自動車道（しまなみ海道）の因島ICで降ります。因島ICは“北”と“南”があり、本州側から来ると“北”で、四国側から来ると“南”で降りないと降りられません。本州の飛行場、四国の飛行場への便もよくないので、東京へ行くときは新幹線になり、また、船の最終便の時間があるので、前泊か後泊は普通で、両方必要になることもあります。

写真１

写真２

鈴鹿では雪が降ったときなど授業予定が変更になることがありますが、弓削では濃霧です。海上だけでなく島の中も真っ白で前が見えません。風が吹かないと濃霧は晴れません。春先には濃霧が多く、船の欠航が２日連続することもあります。船で学校に通っている学生もいるので、休校等を決断しなければなりません。

寮生が７割強です。特に商船学科は全国から来ますので、率が高いです。実家が遠くて、土曜、日曜に実家に帰ることができない寮生が多いので、５月の連休は意図的に休みが続くようにし、さらに、連休の初日を参観日にして、保護者が迎えに来やすいようにしています。

瀬戸内海ならではの催しとして、瀬戸内国際ヨットラリーの寄港地として世界から弓削に来てもらい、ヨット乗りと高専の学生が交流し、史跡を案内したり、サイクリングや食事を一緒に楽しんだりしています。（英語では苦戦をしていますが。）また、NHKの“ジューダイ”という番組に商船学科を中心に学生を紹介してもらいました。

私は忙しくしています。今治市は世界に誇る海事産業集積地（海事クラスター）ですので、弓削商船高専の校長として海事関係の催しに出席も多いです。今治地域の造船関連企業が新入社員研修として行う造船技術センター初級研修の開講式や修了式に激励にいきます。海の日に行われる海上安全祈願祭も案内されます。

商船系高専・大学の学生が（独）海技教育機構の練習船（帆船の日本丸、海王丸、ディーゼル機関の大成丸、銀河丸、星雲丸）で航海訓練を行うのですが、学生達の最後の航海の乗船式で大学・高専を代表して銀河丸での挨拶が私に回ってきまして、船長の訓示の後、学校代表で激励してきました。

授業で教室内を歩き回ることがなくなりましたので、健康のために島を歩き回っています。２つの橋を渡って帰ってくるとちょうど１時間です。橋の高さは海面から20～25メートルくらいあります。怖くて真下の海面はみられません。風のある日はつり橋の綱が音を出し、さらに怖いです。体も揺れます。写真３は夏至のころ、沈む間際を狙ってみました。写真４はお盆休み明けの夕方です。

写真３

写真４

橋の上から2000メートル級の四国山脈の山々が見えると聞いているのですが、いつも、もやがかかって見えません。冬になれば見えるかなと期待しています。また、いい写真が取れたらお送りいたします。

弓削に来てから半年弱の近況報告でした。

高専教員から大学教員へ

豊田工業大学 材料プロセス研究室 助教　南部 紘一郎（h16S卒）（元機械工学科）

鈴鹿工業高等専門学校教職員および同窓生の皆様、お久しぶりです。H15年度材料工学科卒業の南部です。平成23年４月から平成28年3月までの６年間を鈴鹿工業高等専門学校機械工学科助教として勤めさせていただきました。本年度より愛知県名古屋市にあります学校法人トヨタ学園豊田工業大学材料プロセス研究室助教として勤めさせていただいております。

豊田佐吉翁の胸像

本学は愛知県名古屋市天白区にて、（株）トヨタ自動車の社会貢献から開学した私学であり、今年で開学36年目と比較的新しい大学です。学部は工学部のみであり、学生数は400名程度と日本で一番学生数の少ない大学で、少人数教育を主とした研究主導型大学です。また，社会人大学としてスタートしたことから、学生の１割程度が社会人であることに加え、外国人PDや研究員等も数多く在籍しております。

私はその中で熱処理を中心とした表面改質処理に関連する研究を行っている材料プロセス研究室に所属しており、教授１名、助教１名、研究員１名、大学院生９名、学部生５名の研究体制で研究を行っております。

学内シンボルのクスの木

現在は座学等の講義は担当しておらず実験科目のみ担当し、研究に従事する毎日を送っています。居室も学生と同じ部屋ですので、大学院の博士課程の頃に戻ったような印象です。今の立場では、学校運営等に関わる委員会等も少なく、エフォートのほとんどを研究、論文執筆や学会発表、研究費獲得に向けた取り組みや学会運営等の仕事を行っております。約半年が過ぎようとしておりますが、大学の雰囲気や教育など様々な点で高専との違いを実感し始めています。高専祭や、共同研究等で鈴鹿に戻る機会も多くありますので、その際にでもお話できればと思います。

今年は新校舎への引っ越し準備がありますので、バタバタとしておりますが新校舎になりましたら皆様にも是非、豊田工大へ遊びに来ていただければと思います。